http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第２０６５号）

指導資料　国語　第151号

鹿児島県総合教育センター
令和３年４月発行

対象校種	小学校　中学校　高等学校 義務教育学校　特別支援学校

「見える化」で国語を学ぶよさを実感させる授業改善

児童生徒にとって，国語科は他教科等に比べ，学ぶよさを実感しにくい教科である。また，教師にとっても，抽象的で指導しにくいと感じられる教科である。本資料では，国語科で育成する資質・能力，言葉による見方・考え方，そして国語の学び方の「見える化」を学習過程の各段階で促すことで，国語を学ぶよさにつなげる授業改善例を提案する。

１　はじめに

小学生

	1990年		1996		2001		2006		2015	
1位	体育	79.4 (%)	図画工作	86.5	図画工作	83.6	体育	84.9	家庭	90.2
2位	図画工作	75.8	家庭	82.7	体育	81.6	家庭	84.3	図画工作	86.5
3位	理科	71.4	体育	80.9	家庭	79.6	図画工作	79.1	体育	83.1
4位	家庭	67.8	理科	71.3	音楽	69.7	理科	68.5	外国語（英語）活動	77.6
5位	音楽	57.6	音楽	62.2	理科	68.2	総合的な学習の時間	67.0	理科	75.2
6位	国語	52.2	国語	61.0	総合的な学習の時間	61.0	音楽	66.8	総合的な学習の時間	74.4
7位	算数	51.8	算数	53.1	算数	55.6	算数	62.8	音楽	71.5
8位	社会	50.9	社会	51.4	国語	54.7	国語	53.4	算数	68.4
9位					社会	49.6	社会	48.0	国語	58.5
10位									社会	55.6

上の表は，ベネッセ調査「第５回学習基本調査（2015）」における小学生の「好きな教科・活動ランキング」である。小学生は国語科が好きだと回答した者は他教科等に比べ多いとは言えず，中学生も同様の結果である。

一方，児童生徒の好きな教科・活動を見てみると，図画工作科，体育（保健体育）科等が挙げられる。図画工作科では絵画や彫塑などの作品づくりを通して，学んだことが作品という実体として「見える化」される。また，体育（保健体育）科では，学習を通して「～ができるようになった。」という実感を伴い，熟達したスキルとして学んだことが「見える化」される。教科等の特性があるので一概に比較できないが，国語科の学習では，児童生徒が学んだことが見えにくいのではないかと考えられる。そのため，児童生徒は国語を学ぶよさを感じにくく，国語科が好きだと回答できない要因の一つではないかと考える。

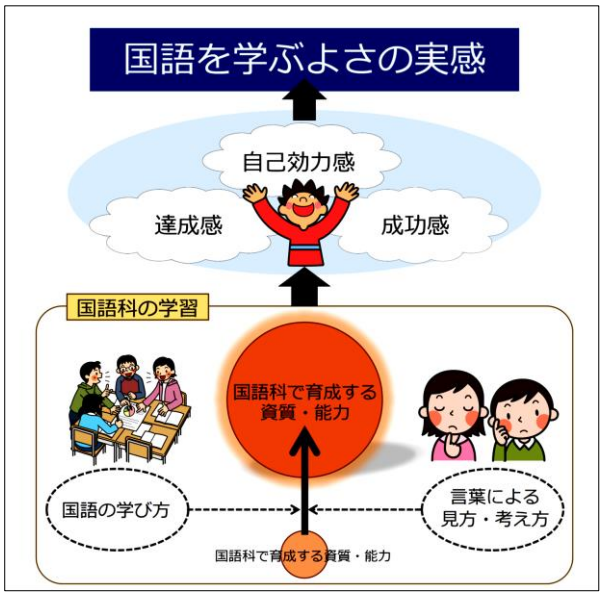
そこで，国語科の学習で様々なものを「見える化」することで，児童生徒に国語を学ぶよさに触れさせることができると考える。

２　国語を学ぶよさと「見える化」の関係

国語を学ぶよさに迫るためには，**資料１**のように，児童生徒が国語科の学習で育成され

た資質・能力を実感し，達成感や成功感，自己効力感などを感じることが必要である。

資料１　国語を学ぶよさの実感に至るイメージ



国語科で育成を目指す資質・能力によりよく迫るためには，言葉による見方・考え方を働かせたり，様々な国語の学び方を駆使したりすることが大事である。しかし，これらは意識しないと非常に見えにくい。

そこで，**資料２**のように，国語科の学習過程の各段階において，これらの「見える化」を意識した指導を心掛けることが必要である。

資料２　国語科の学習過程における「見える化」

学習過程	「見える化」
導入 つかむ・みとおす	課題の「見える化」
展開 しらべる・ふかめる	考えの変容の「見える化」
終末 ふりかえる・いかす	学んだことの「見える化」

３　「見える化」による授業改善の具体

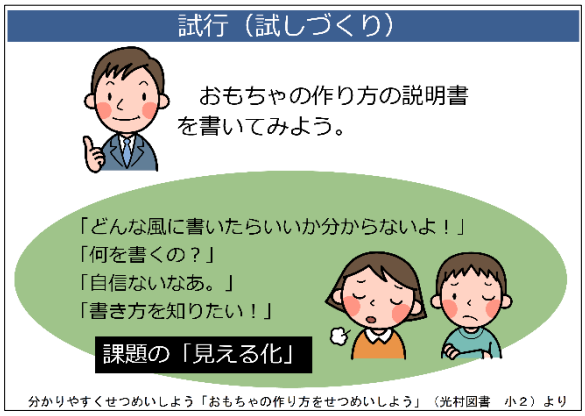
(1) 課題の「見える化」

自分にとっての課題，自分が解決したいことの「見える化」

国語科では，図画工作科等に比べ，児童生徒は学習したことを用いて考えたり，感じたり，伝え合ったりすることに対して自分なりの課題を感じていない場合が多い。そのため，国語科の学習では，教科書教材を使って，教材の読み取りや言語活動を行うものの，いわゆる「活動あって学びなし」の目的が明確でない学習になりやすい。

そこで，学習の導入で，学習前の自分の国語の資質・能力や働かせようとしている言葉による見方・考え方，試みようとしている国語の学び方など，児童生徒一人一人の課題を「見える化」することで，国語を学ぶ目的を明確化し，児童生徒が国語の学び方の見通しをもてるようにする。その結果，国語科を学ぶ原動力につながると考える。

授業改善例①



単元の導入で，試行（試しづくり）として敢えて，単元全体で取り組む言語活動（ゴールの言語活動）に取り組ませることで，児童生徒一人一人が「分かること，分からないこと」，「できること，できないこと」などを区別し，学習課題を明確にすることができる。

そのため，児童生徒一人一人にとって解決したい切実な課題意識が芽生え，「何を学ぶのか」という学習の目的や，「どのような方法で追究するのか」という学び方の見通しをもたせることができる。

注意したいのは，児童生徒がこれまで経験したことのある言語活動はイメージしやすく取り組みやすいが，初めての場合はそうではない場合が多いということである。そのため，試行（試しづくり）は，既習の言語活動を通して学習する場合の方が，より効果的であるということを念頭に置いて授業づくりをしてほしい。

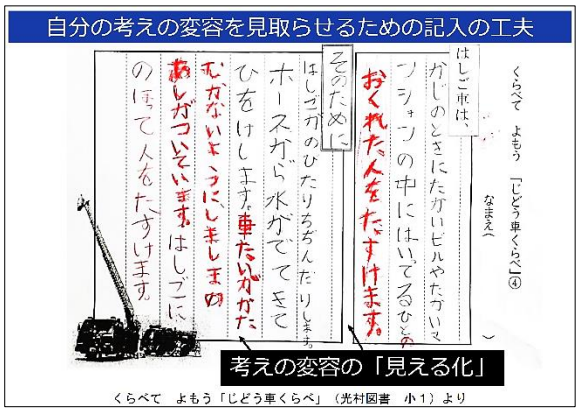
(2) 考えの変容の「見える化」

国語科の学習を通して変容する自分の考えの「見える化」

国語科の学習は，図画工作科等に比べ，児童生徒が学びの中で働かせた言葉による見方・考え方や自分の思考の広がりや深まりを客観的にモニタリングしにくいため，現在取り組んでいる学習が自分の考えの構築に影響していることに気付きにくい。

そこで，学習途中の自分の国語の資質・能力や働かせた言葉による見方・考え方，駆使している国語の学び方など，学びの過程における自分の考えの広がりや深まりを明確化することで，分かるようになっていく，できるようになっていく自分に対して自己効力感を得られるため，国語を学ぶよさを実感することにつながる。

授業改善例②



最初の自分の考えをノートやワークシートに構築した後，学びを通した自分の考えの変容を「見える化」する。

その際，最初の考えが残るように消しゴム等を使わせず，訂正線等を用いさせたり，朱書き等で加除・修正させたりすることで，学習を通した自分の考えの変容が見取れるようにする（写真の例では，新たな考えを朱書きで加えている）。

その前提として，朱書きをすることは恥ずかしいことではなく，朱書きが学んだことであるという意識をもたせることが大切である。

(3) 学んだことの「見える化」

国語科の学習を振り返り，学んだことの「見える化」

これまでも述べているとおり，国語科の学習においては，児童生徒は「〇〇を学んだ」という実感をなかなか得られにくいことが多かったのではないかと感じる。

これは，国語科の授業において育成された資質・能力や働かせた言葉による見方・考え方，活用した国語の学び方など，授業を通して学んだことの実感が希薄だからである。

そこで，学習後の自分の国語の資質・能力や働かせた言葉による見方・考え方，活用した国語の学び方など，学んだことを確実に振り返らせ，自分自身に対して自己効力感をもたせることが重要であると考える。つまり，教材の読み取りに終始したまとめではなく，身に付けた国語の資質・能力に帰着するまとめや振り返りが大事なのである。

また，学習の振り返りをシートやノートに書くことが目的ではなく，振り返ることが目的であるので，口頭で友達同士で伝え合う活動等も視野に入れて検討する。

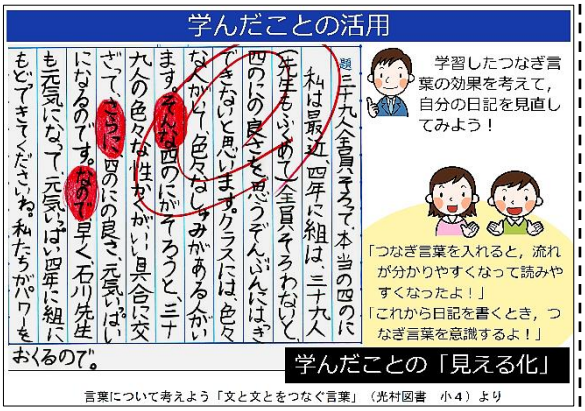
授業改善例③

単元や１単位時間の終末時に，導入で取り組ませた試しの言語活動に再度取り組ませることで学んだことを明確にすることができる。その結果，学習の導入時の課題が解決され，児童生徒は学んだことを生かせたという達成感とできるようなった自分自身に対しての自己効力感を得ることができ，

この学びのよさを実感することができる。その際，試行（試しづくり）で行ったものと実際に並べて，その内容の質や量を比較させることが重要である。

また，学習の経緯や最終的な考えに至った理由を考えさせることで，育成された資質・能力や働かせた言葉による見方・考え方，獲得した学び方が具体化・一般化され，次の学びに生かせるようになると考える。

授業改善例④



学んだことを，当該単元や教科内での学びで完結させるのではなく，他の単元や教科等の学び，児童生徒の日常生活に意図的に結び付ける。その結果，学んだことが生かせたという実感を得ることができるようになり，自己効力感を再確認することにつながる。

その際，指導計画の段階から綿密に計画的に行うことだけでなく，単元や１単位時間をすぐに生かすという考え方の下，日々の授業に積極的に設定していくことが大切である。

また，主に「書くこと」や「話すこと」に関する学習では，自分の考えの表出の場面があったり，実際に児童生徒が取り組んだ成果物があったりすることから，学んだことが「見える化」されやすいが，「読むこと」や「聞くこと」に関する学習では難しい。そのため，「書くこと」や「話すこと」など，学んだことが「見える化」されやすい言語活動を設定するなど，単元構成を十分検討する必要がある。

４　おわりに

本資料では，「課題の『見える化』」，「考えの変容の『見える化』」，「学んだことの『見える化』」を促す授業改善を図ることが，児童生徒に目指す資質・能力を育成したり，働かせた言葉による見方・考え方を自覚させたり，また国語の学び方のバリエーションを増やしたりすることにつながると提案してきた。

もちろん，授業づくりの際，最初からこの視点で考えるという方法もあるが，まずはこれまでの自分の授業で「見える化」できるところを探すことが授業改善の第一歩になると考える。このような授業改善を積み重ねることで，多くの児童生徒が国語を学ぶよさを実感できる国語科授業の実現につながれば幸いである。

－主な参考・引用文献－

○　文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』平成 29 年
○　文部科学省『中学校学習指導要領解説国語編』平成 29 年
○　鹿児島大学教育学部附属小学校『個の確立を目指す授業の創造（研究紀要）』平成 25 年
○　水戸部修治『小学校新学習指導要領　国語の授業づくり』平成 30 年　明治図書
○　中村和弘『見方・考え方［国語科編］』平成 30 年　東洋館出版社
○　苫野一徳『「学校」をつくり直す』平成 31 年　河出書房新社
○　ベネッセ教育総合研究所『第５回学習基本調査 DATABOOK』平成 27 年

（教科教育研修課　　石川　雅仁）